

時刻	次第・発言者	発言内容
13:30	<p><開会行事> 進行(馬場総括)</p> <p><開会挨拶> 森山課長</p>	<p>開会の言葉</p> <p>「令和4年度第2回「地域連携コンソーシアム会議」の開会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。委員の皆さまにはご多用のところ本会議にご出席いただき、ありがとうございます。</p> <p>早いもので、6月の第1回会議から5か月が過ぎようとしています。この間、青少年の家でのワンデイキャンプ、豊後大野市千歳公民館の「ひょうたんカレッジ」を実施しました。また、先週12日には大分大学で生涯学習講座が開講しました。そのほかに情報サイト「かたろうえ大分」の開設や全県規模の調査、公民館職員対象の研修なども実施しております。さまざまな取組を実施する中で課題も増えてまいりました。</p> <p>本日の会議では、まず事業の現状や調査結果について報告いたします。その後、3つの分科会でそれぞれのテーマに沿った協議をいただきます。どうぞ本事業の推進・発展のために委員の皆様のお知恵をいただきますよう、お願い申し上げます。</p> <p>先日、令和4年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰の受賞者が決定しました。これは障害者が生涯を通じて教育やスポーツ、文化などの様々な機会に親しみ、豊かな人生を送ることができるような学びを支える活動を行う個人又は団体について、その功績をたたえるもので、全国で56の個人と団体が受賞します。本県では国東市の「ギャラリー通り実行委員会」様と、麻生委員が主宰する「レッツダンスでガッツ元気の会」様が受賞されました。おめでとうございます。これまで、佐藤委員が所属されている「ソニー・太陽」様は平成30年度に、松尾委員が代表を務められている「ヨカたの」様も令和2年度、池部委員が所属される「太陽の家」が昨年度に受賞されていることをこの場を借りてお伝えします。</p> <p>短い時間ではありますが、委員の皆様には、本事業の推進のため、忌憚のないご意見をいただきますよう重ねてお願い申し上げます、開会の挨拶といたします。</p>
13:40	<p><参加者紹介></p> <p><座長選出> 進行：岡田座長</p> <p><事業実施状況> 岡田座長</p>	<p>参加者紹介 紙面にて紹介 —協議—</p> <p>座長 岡田教授 副座長 森山課長(第1回と同じ)</p> <p>(1) 報告 事業実施状況について ①大分大学の取り組み(別紙資料のとおり) (質問) 講座の内容(ダンス、太極拳)を選定した理由 (回答) 1回2時間で考えている際、ずっと座りっぱなしはしんどいだろうということでスポーツを1つの柱にして1時間、休憩15分を挟んで、もう1つを共通講座として45分、チームに分かれて協議をするというスタイ</p>

		<p>ルをとった。ダンスについては体を動かす点で入りやすそうなので取り入れた。今年ニーズを聞きながら、スポーツメインの講座とか話す中心の講座とか色々していきたいと思っている。</p>
森山委員		<p>(質問) 資料では5名参加希望で4名受講となっているが、1名受講しなかった理由は何か。中身</p>
岡田委員		<p>(回答) まだ中学校3年生の方が希望された。今回の講座の趣旨として社会人をメインに、高等部の3年生までは対象に入れようと。ちょっと中3は…ということになった。来年以降は年齢制限の緩和も考えるが、今年はちょっと遠慮いただくということになった。</p>
池部委員		<p>(質問) ①どうかたちでこの5回分の講座の成果を見ていくのか？ ②次年度以降の事業に活かすという観点でいくと、前半2回のダンスと後半3回の太極拳では「動」と「静」という違いがあるが、どういう運動が適しているか見るためにも、2種目ではないほうがいいのかと思う</p>
岡田委員		<p>(回答) ①試行錯誤しながら、講座の中で興味やニーズを受講者中心に把握をしたい。アンケート調査のデータも踏まえたい。あとやり方の検証。どういふことをどのようにやればいいのか試行している段階。 ②既に広報済みなので別の種目は難しい。来年度以降はニーズに即して作る。</p>
小俣		<p>②県立青少年の家の取り組み</p>
工藤委員		<p>(質問) ボランティアはどのように募集・参加したのか。</p>
小俣		<p>(回答) 基本的にボランティア参加無し。必要に応じて事業所の職員の方がついてきてくれた。あと香々地の職員と、県の職員1, 2名</p>
岡田委員		<p>(質問) 今後はボランティアの募集・登用の計画はあるか</p>
小俣		<p>(回答) 今のところニーズはあがってきてないが、検討したい。 ボランティアとの連携を蓄積していくことも大事。</p>
佐藤委員		<p>(質問) アンケート用紙を見ると、高田みづほ園とスクラムサポートでは、事前の対応について数字(みづほ園5、スクラム2)が随分違うのはなぜか？</p>
		<p>(回答) 高田みづほ園は事前に施設に来所し、活動の流れの確認を行った。スクラムサポートさまは電話での打合せのみ。実際にしてみると移動距離が長いなど来てみないとわからない部分があるので、今後もいつでも下見を受入れているので打診は続けていこうと思う。それで評価が分かっている。</p>
池部委員		<p>(質問) 今回障がいがある方を受入れたのは初めてだと思うが、来年から「やって」と言われたらできそうな感触か。</p>
小俣		<p>(回答) ぜひ、回数を増やしていきたい。「しんどかった」「辛かった」「もうやりたくない」という声はなかった。配慮の必要があるか確認するが、是非通常での受け入れを実施していきたい。実績ができたことを嬉しく思う。</p>
野中		<p>②千歳公民館(モデル事業)の取り組み</p>
		<p>(課題) コロナの影響が大きい。農山村地域なので、どうしても家のことや農作業があってボランティアに来られないことも多かった。</p>
岡田委員		<p>(質問) 火曜日で統一されている。また、年齢層としてはどうか。</p>
野中		<p>(回答) 火曜日が公民館の都合が良かった。</p>

<p>衛藤委員</p>	<p>年齢層としては支援学校卒業生15年くらいは対象になると考え、概ね20～30代前半でご案内をしている。</p> <p>(質問) 公民館の事業はとても重要。最終的に大分県内のそれぞれの公民館でこういう事業が行われると良い。どのようにして参加者を募るのかという方法論から試行錯誤の状況の中、いろいろな労力を使われている。人数の多い少ないという議論があるかもしれないが、私としてはよくぞ(募集に対して)返答してくれたな、参加してくれたなと思う</p>
<p>清末委員</p>	<p>(回答) 同窓会の関係ですが、個人に出すかたちもあるが、各特別支援学校のHPに「同窓会」のコーナーがあるので、そこに掲載してほしいという依頼をすれば掲載が可能である。広く同窓生に伝える</p>
<p>後藤委員</p>	<p>(回答) お手紙を本校は出すようにしている。そのときに今回の大分大学の案内も同封した。インターネットが苦手という方もいらっしゃるので、昔ながらのお手紙というのも大事にさせていただけたらと思う。</p>
<p>池部委員</p>	<p>(質問) なかなかそれぞれの公民館で行うのは難しいという印象を持たれているとのことだったが、具体的にどういった点で難しさがあるのか。</p>
<p>野中</p>	<p>(回答) 指定管理事業者で7つの公民館を運営しているが、ある公民館である場合、スタッフを集める。そのため人数的に難しい。あとは、ユニバーサルデザインにマッチしたデザインになってきてはいるが、まだまだそれぞれの公民館ごとに課題がある。立地条件や交通アクセスなど。色々なものがそろわないとできない。それぞれの公民館は3、4名でまわしているがその人数で事業をしようとなるとなかなか厳しい。どうやって協力者を得るかが大事。なるべく地域の方のニーズに合わせた講座になったら、一緒に勉強できるというスタンスで良いのではないかと思い、地域の方にも声をかけた。</p>
<p>岡田座長</p>	<p>・まずできるところから着手するためには、こういう対象の方であれば自力で来られてサポートが不要だとか、ボランティアをどう育成していくか、どこと連携するかなど、公民館のあり方も変わっていくかもしれない。</p>
<p>松尾委員 野中</p>	<p>(質問) 協力者の年齢構成は？</p> <p>(回答) 働いている年代の方はなかなか時間が許さない。土日は作業所の方が出にくいので、平日にすることになれば地域の高齢者になる。地域の配食サービスをされる方、コミュニティカフェの方、ボランティア団体のかたに声をかけて一緒に高齢者大学みたいなイメージで勉強しませんか？というかたちでお誘いしている。</p>
<p>松尾委員 野中 松尾委員</p>	<p>(質問) 何人くらい？</p> <p>(回答) 今のところ4名。少ないのが大きな課題だと思う</p> <p>(質問) 4名でも多いのではと思います。</p>
<p>衛藤委員</p>	<p>③県立図書館、県社会教育課の取り組み</p> <p>(質問) 国会図書館が視覚障がい者のためのデータベース提供を行っている。登録制。学習障がい・発達障がい・知的障がいのために解放するという動きがでた。そのためのデータベースの使い方講座とか。デジタル的なもの</p>

		<p>を利用しやすくするための講座を県立図書館で行うなどができるのではないか。</p> <p>(2) 報告 「障がい者の学びに関する事態及びニーズ調査」結果について</p> <p>(質問) 精神障がい者がどれくらい対象者に入っているのか (回答) 報告書P 3 精神障がい者の方からは153名の方から回答をいただいている。障がい種別にどういった実態やニーズがあるかというのは今後の分析。</p> <p>後藤委員 (質問) 概要版が分かりやすくてよいが、総括のところでもいいと思うが簡潔にしてルビをふって、出してくれた方に「こういう結果でしたよ」と返すようにしていただけると良いと思います。</p> <p>岡田座長 (質問) 来年・再来年に調査をする計画があるか。 首藤 (回答) 来年の調査予定はない。事業を3年間したあとについては何らかの調査をしなければならないと考えている。</p> <p>岡田座長 (質問) 調査票を作るのが良い学びになる。調査結果の分析について委員会であれこれ言い合うのが良い。意味の無い分析もあるので、実際関わっている者で分析をすると良いのではないか。</p> <p>衛藤委員 (質問) 多いか少いか誰にも分からない。到達状況としてどのようなものを目指していくのか。障がいのない人や多障がいの方、他県の方にも聞いて比べられるものがないと、どこをめざしていくのか、それを施策に反映していくことが大事。この調査が行われたこと自体には意義がある。</p> <p>横山委員 (質問) 障がいの重い方 重度とか中級の方のデータはありますか 首藤 (回答) 設問で細かく障がいの度合いを聞こうかと思ったが問が多く長くなるので、今回の設問には障害の程度は入れていない。「自由記述欄」には重い障害を持つ子の親の意見などがある。</p> <p>横山委員 (質問) 重度・重複の方を対象にしたアンケート調査も行われているのでそのへんも参考にしたらよいと思う。</p> <p>() (質問) 「概要版P 3のニーズのところ、どのような障がい種の方がスキルをアップさせたいと思っているのかが知りたい。たとえばパソコン教室が眠っているのでそこを活用させて何かしたいと思っているので知りたい。クロス集計ができたらずひ教えてほしい。</p>
14:30		<休憩>
14:40		<分科会>
15:20	馬場	<p><分科会報告></p> <p>第1分科会:「県下で取組を普及させるための方策について」</p> <p>大前提として福祉と教育の違いを明確にしておく必要がある。福祉＝サービスの提供がメイン、教育＝活動の中に「学び」が欠かせない。普及させるという点では、重度の方よりも大分大学のような軽度の知的障がいの方から取組</p>

	岡田座長	<p>み、蓄積して広げていくことが良いのではないか。</p> <p>また、様々な施設に「来てもらう」だけでなく「出かけていく」施設のノウハウやプログラムを公民館や事業所に赴いて提供することが必要。そのためのパターンを研究していくべきだ。</p> <p>取組の拡散については、モデルを作って研修会や説明会で説明するパターンもあるが、Facebook を使うなどもっと柔軟なやり方があって良いのではないかという意見が出た。</p> <p>第2分科会：「調査結果を踏まえた講座・プログラムの開発について」報告</p> <p>単純集計だと、どんな人に何をすれば良いかがなかなか議論しづらい。クロス集計をもらってから再度話したい。</p> <p>利用者のニーズと保護者のニーズと社会的必要とをそれぞれ反映させて組み合わせながらどのように提供していくかを検討する必要がある。</p> <p>「障がいのある人の学び」を意識していたが、本人と保護者、支援者、ボランティア、運営者が考えなどを交流・協議する要素を含めたプログラムを開発し、実施していく必要があるのではないか。もっと言うと、「障がい者のためのプログラム」をつくる必要はなくて、多様な方が参加して、交流するプログラムをつくっていきたいというのが方向性のひとつ。またそのようなプログラムをつくる際、企業の CSR 活動の一環として、あるいはそれを支える人材を確保できるような体制作り。講師の養成に加えてコーディネートする人、つなぐ人、マネジメントができる人、というように地域で「仕組み」をつくっていくことも必要ではないかという話がでた。</p> <p>社会教育とは自主的なプログラム。社会教育と福祉分野でやることをそれぞれうまく組み合わせて実施することを検討する必要がある。</p>
	太郎良	<p>第3分科会：「ボランティア・支援者の育成について」報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育成方法について。 <p>①「活動しながら学んでいく」実際に体験しながら学んでいく</p> <p>②ある程度の知識を得て活動に入っていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア・支援者として活動している人 ・地域の大学生、地域の方（イベントに集まる方、公民館の講座参加者）に声をかけて支援してもらう。また、学校の先生に参加してもらい、支援してもらうというように、色々な人に関わってもらったらどうかという意見がでた。 ・課題としては、活動場所への送迎がある。気持ちはあってもそこに行くまでが大変だということで、送迎のボランティアもあると良いが、命を預かるので、ホームページでの周知やタクシーチケット、高齢者チケットのようなものを使ったり、スポンサーになってもらって出してもらうというなど活動場所と人をつなぐという課題を解決していくと良いのではないか。最終的に育成するためには、早い段階からこういう経験を積んでおく、学校教育の中で若いときから経験を積ませるなかで「あたりまえ」になっていくのではないか。大人になってからも新任研修の中で障がい者と出会う

